

詩篇 75 篇

0 指揮者のために。「滅ぼすな」の調べに合わせて。アサフの賛歌。歌

《二重の感謝》

- 1 私たちは、あなたに感謝します。神よ。私たちは感謝します。
御名は、近くにあり、人々は、あなたの奇しいわざを語り告げます。

《まことの審判者》

- 2 「わたしが、定めの時を決め、わたしみずから公正にさばく。
3 地とこれに住むすべての者が揺らぐとき、わたしは地の柱を堅く立てる。セラ
4 わたしは、誇る者には、『誇るな』と言ひ、悪者には、『角を上げるな。
5 おまえたちの角を、高く上げるな。横柄な態度で語るな』と言う。」

《悪人に注がれる審き》

- 6 高く上げることは、東からでもなく、西からでもなく、荒野からでもない。
7 それは、神が、さばく方であり、これを低くし、かれを高く上げられるからだ。
8 【主】の御手には、杯があり、よく混ぜ合わされた、あわだつぶどう酒がある。
主が、これを注ぎ出されると、この世の悪者どもは、こぞって、そのかすまで飲んで、飲み干してしまう。

《とこしえの賛美》

- 9 しかし私は、とこしえまでも告げよう。ヤコブの神を、ほめ歌おう。
10 悪者どもの角を、ことごとく切り捨てよう。しかし、正しい者の角は、高く上げられる。

本篇の大きな特徴は、1節で「感謝します」「感謝します」と二重の感謝をもって歌い始められていることでしょう。74篇では凄まじい敵の蹂躪に絶望する詩人の叫びが響き渡り、訴えでもって締めくくられていました。75篇にも「敵」の存在が背後にあることが分かります。4節には「誇る者」「悪者」という表現が出てきて、彼らは「角を高く上げ」（5節）、「横柄な態度で語って」（5節）いたことが分かります。人間は武力や経済力が増し加わると、自分が何者かになったように錯覚するようです。ここで言われている「角」とは「力」を象徴しています。敵対者は小国イスラエルに対して支配権を振るうことで、実は神に挑戦しているのです。しかし、神に対して高ぶる国々がことごとく打ちのめされてきた歴史を忘れてはなりません。エジプトも、アッシリヤも、バビロニアも、ペルシャも、ギリシャも、ローマも、その帝国が永久に残ることはないのを聖書読者は知っているでしょう。

神がどのような審きをなさるかが、そこかしこに記されています。神は「定めの時」を決定しておられる（2節）。人の目には永遠とも思われるような苦しい状況も、神には一瞬であり、ふさわしい審きの時は既に定められているというのです。また、神は「公正に」審くお

方でもあります（2節）。不完全で不正だらけの人間の裁きに対し、神の審きは完全なる均衡があり、首尾一貫し、誠実であり、物事の表面だけを見ての判断ではなく人の心の動機や隠された事実に基づいて審きが行なわれる。また、「地の柱を立てる」お方であるとも言われています（3節）。古代において、目に見える世界は「柱」によって支えられていると考えられていました。この「柱」とは「神の基準」を指すでしょう。価値観が移り変わる世界にあって、ただ一つ変わらぬもの、それは「神の基準」です。私は「柱」からキリストの十字架を想起しました。すべての人の審きの基準、救いの基準が、ゴルゴタの十字架にある。

6～7節では、「高く上げる」「低くする」という「栄光」に関わる内容が出てきます。神の国の真理とは、この世の価値基準とは真逆であることを忘れてはなりません。「**だれでも人の先に立ちたいと思うなら、みなのがりとなり、みなに仕える者となりなさい**」（マルコ9:35）。人よりもまさる者になりたいと考え、信仰生活にまでその基準を持ち込んでしまう危険性は常にあります。むしろ、誰よりもへりくだり、人を愛し、仕え尽くした人こそ、神によって高められるのです。このような生き方は、社会的に身分が高い人にも低い人にも可能なことです。与えられた立場をいつも「神からお借りしているもの」と胸に刻んで生きるところに、その立場をもってどのように神と人に仕えるべきかを考える思考が生まれてくるからです。本篇で糾弾されている敵対者は、自分の強い立場を「自ら得たもの」と誤認してしまっているでしょう。

8節では「審きを酒のごとく飲む」という表現が出てきます。「**主の御手には、杯があり、よく混ぜ合わされた、あわだつぶどう酒がある。主が、これを注ぎ出されると、この世の悪者どもは、こぞって、そのかすまで飲んで、飲み干してしまう**」。「杯」とは、聖書では一般的に「神の怒り」や「審き」を表し、類似した表現は旧約聖書にも新約聖書にも多く見られます¹。「よく混ぜ合わされた、あわだつぶどう酒」とは、甘くて美味しく、口当たりが良くてグイグイ呑むことができるけれど、ついには酔いつぶれてしまう酒のことが言われています。これはもちろん比喻であり、神に与えられた身分を乱用して好き放題に生きている者たちが、ついには身を滅ぼすに至る、つまり神の審きの前にまったく立ち果せぬ者となることを言い表しています。人にとって最重要な事柄は、罪の赦しの福音を信じることです。この福音は、心の貧しい者、つまり自らの罪を深く知って苦しみ、そこからの解放を切望している者こそ受け取ることができるのです。

本篇も賛美で締めくくられます。感謝で始まり、とこしえの賛美で終わります。ところで、一点、なぜ「イスラエルの神」ではなく「ヤコブの神」という言い方が敢えてなされているのでしょうか。確かに、族長ヤコブは神と戦った日から「イスラエル」と命名されました（創世32:28）。そして、その名は民族名となりました。しかし、その後も折々に「ヤコブ」と呼ばれるところには、人間的弱さ・愚かさを具えた民をお救いになる神の一方的な恵みを感じられます。心の低い人を高めるのも、心の高ぶった者を低めるのも、いずれも神の御業です。私たちも自分の弱さを誇り（Ⅱコリント12:9）、どこまでも「低み」を目指して歩んでいきたいと思えます。

¹ エレミヤ 25:15, 16、27-28、51:7、エゼキエル 23:31-33、イザヤ 51:17, 22、ゼカリヤ 12:2、ハバクク 2:16、マルコ 14:36、黙示録 18:6